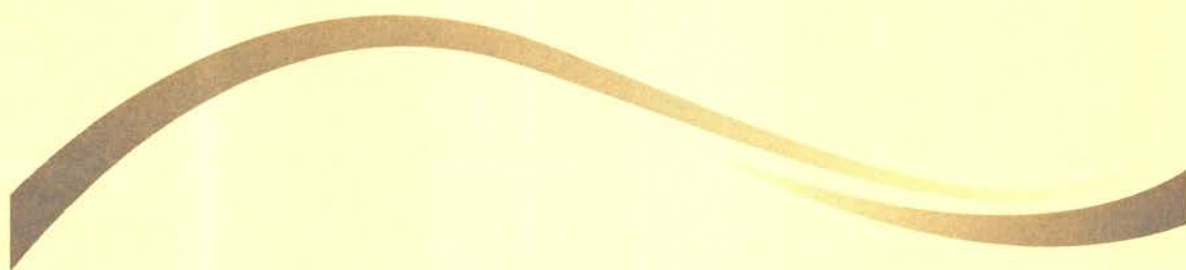


IV まとめ



IV まとめ

1. 成果	113
(1) 児童生徒の「内面の変化」への着目と働きかけの重要性	
(2) 学部間の連携の必要性	
2. 課題	113

IV まとめ

平成 20 年度から 24 年度までの 5 年間、ICF（国際生活機能分類）の理念に学び、児童生徒が活動性を向上させながら自己実現をめざしていくための研究実践に取り組んできた。

今年度、研究主題を「キャリア発達支援の視点による、小中高 12 年間を見通した学習活動の充実・改善」とし、これまでの研究の成果を活かしながら、教育のあり方を幅広く見直すキャリア教育の視点で、実践に取り組んできた。

今年度の研究実践に見られたいくつかの成果と課題を挙げる。

1. 成果

（1）児童生徒の「内面の変化」への着目と働きかけの重要性

キャリア発達支援の研究にあたって、昨年度、小学部、中学部、高等部の教員が学部の枠を越え、縦割りグループでのワークショップを実施し、小中高それぞれの学部で大切にしていることや育みたい力の検討を行った。そして、今年度、各学部における大切にしたいことや、めざす児童生徒の姿を確認し、これらに基づいて取り組んできた児童生徒のキャリア発達を促す授業実践を通して、これまでの研究で大切にしてきた「内面の変化」への着目と働きかけの重要性を再認識した。

具体的には、日々の関わりや授業実践の中で、子どもたちの行動の変容と共に内面の変化に着目し、「子どもたちの好きなことや得意なことを探る」「言葉にできない思いを代弁する」「生徒と共に目標を設定する」「充実感や達成感を得るような活動の場を設定する」「自分だけでなく友だちの様子や活動にも意識を向けるよう働きかける」「自分を振り返る場の設定や働きかけをする」等の支援を行っていくことが、子どもたちのキャリア発達を促すために、教師の役割として大切であることをあらためて学んだ。

（2）学部間の連携の必要性

学部間の連携の実際には、中学部、高等部の 6 年間を見通した進路指導計画を検討作成し、それに基づいて実践してきた。この取り組みは中高の教員が合同研究の形で進め、それぞれの進路指導の現状を相互に確認しながら改善点（課題）を見出すことができた。中学部 3 年生の就業体験に関する事前事後学習の充実、高等部の就労移行支援事業所と連携した「就労アセスメント実習」の実施は、一つの成果であった。また、これらの進路指導の充実改善に向けた取り組みの中で、中 3 生徒の高等部作業学習の見学と体験実習、中 3 就業体験に向けた高等部生徒による体験談の紹介、中高合同で行った現場実習報告会の実施等、中高それぞれの学部を越えた学習活動の展開と協議を行うことができた。

2. 課題

今年度は、児童生徒のキャリア発達を促す授業実践に向け、各学部の中核となる学習活動の内容と方法について検討を行ってきた。今後は、小中高 12 年間の学習活動の関連性や系統性についても焦点を当て、検討を行っていく必要がある。児童生徒の「いま」と「これから」の生活を考えながら、キャリア発達を促す授業を計画、実践していくことができるよう、教師の姿勢や具体的な手だて等を整理し、学校全体で共有化することを課題としたい。